資料紹介

アジア民衆の反日・抗日のうた
―― 笠木透の替え唄研究 その4 ――

鵜　野　祐　介

＜緒　言＞

本誌648号に引き続き、笠木透の替え唄研究を紹介する。今回は、日清戦争の原因となったとされる甲午農民戦争が勃発した1894年頃からアジア太平洋戦争が終結した1945年までの約半世紀の間に、日本の帝国主義政策によって抑圧・弾圧されたアジア諸国・諸地域の人びとの間で口ずさまれた反日・抗日のうたを、替え唄のみならず、創作の歌や作者不詳の伝承の唄も合わせて取り上げる[1)]。

1999年に刊行されたCDブック『鳥よ鳥よ青い鳥よ　日本の侵略と韓国の抵抗のうた』（たかの書房）の「まえがき」に、笠木は次のように記している。

> ここにあるのは、朝鮮・韓国の人たちが、植民地時代に、どんな思いをこめて、どんな歌をうたっていたのか、その小さな研究レポートです。足で歩いて調べ、貧しくても、ありったけの想像力を使って書いたものです。資料も資本も才能も語学力もなく、時間もないぼくと、ぼくの友人たちの仕事ですから、不備、未熟、未完なものです。恥しい限りです。でも、それでもこのCDブックを出版する理由は、いまの日本の子どもたちに、これらの歌を聞いてほしいからです。（中略）
>
> たくさんの抗日や反日の歌が生まれました。ここに収録したのは、そのほんの一部です。これらの歌と、その時代背景を、先生や大人たちと一緒に学んでほしいと思います。
>
> また、抗日とか反日ということに関係なく、何も知らずに聞いても、これらの歌の美しさに感動することでしょう。朝鮮・韓国の人たちは、こんなにも美しい歌を生み出す民族なのです。（中略）
>
> 私たちは加害者だった。そのことを心に刻んで、忘れないようにすること。それが、私たちが再び加害者にならないための、たったひとつの方法でしょう。いつの日か、日本と韓国の子どもたちは、一緒に遊び、共に生きる時代がくる。人間なら、いつか分りあえる。それがたとえ百年かかろうとも、絶望することはないと思っています。遠望楽観でいきましょう。

このCDブックに収められた21編[2)]のうち、替え唄であることがはっきりしているのは3編、あとがきに登場する「いろはにこんぺいとう」の韓国朝鮮バージョンを含めても4編にすぎない。残りは3編の朝鮮民謡と14編の創作歌謡である。けれども、これらの替え唄と民謡や創作歌謡は歌詞のモチーフにおいても旋律においても大きな隔たりはなく、おそらく歌っている人びとの中でも、反日･抗日の想いと愛国心を歌ったうたとして、同じカテゴリーに入れられていたものと思われる。そのため、「替え唄研究」と銘打った本稿ではあるが、「反日・抗日のうた」としてこれら全てを紹介することにした。

同書の「あとがき」に、「さて、次は中国です。どこまで続くぬかるみぞ――いや、楽しみです」

と笠木は記したものの、続編が刊行されることはなかった。ところが、彼の死後3ヶ月が過ぎた2015年3月、奥様の笠木由紀子氏、音楽仲間だった増田康記氏からお借りしたファイル（以下「笠木ファイル」）の中に、中国、台湾、ビルマ（ミャンマー）、フィリピンで口ずさまれた「反日・抗日のうた」に関する資料が含まれていることが分った。本稿にはこれらのうたの歌詞も全て掲載する。

半世紀にわたる日本の侵略・統治政策に対する、アジア民衆の想いが凝縮した替え唄や民謡や創作歌謡を収集することに情熱を注ぎ、今日の日本の子どもたちに聞いてもらいたいと願った笠木の遺志に、少しでも応えることができればと期している。

＜凡例＞

・国・地域別に紹介する。「A. 替えうた」「B. 民謡（作者不詳の伝承歌謡）」「C. 創作歌謡（作者が特定される歌曲）」に分けて、日本語訳の題名の50音順に掲載する。但し、Ⅰ．韓国・朝鮮のC. 創作歌謡は、発表された年代順とする。
・替えうたは、替えうたの題名、元うたの題名・歌詞、替えうたの歌詞の順に紹介する。元うたは太字で表記する。
・元の言語の歌詞は1番のみ掲載する（韓国語の転写は立命館大学大学院生・河美善さん、中国語の転写は同大学院生・祝心怡さんによる）。

＜テキスト紹介＞

Ⅰ．韓国・朝鮮

A. 替えうた

(1)「いろはにこんぺいとう（さよなら三角）」（元唄：日本のわらべうた）

（日本で一般的に知られている唄）

いろはにこんぺいとう　こんぺいとうは甘い　甘いは砂糖　砂糖は白い
（または）さよなら三角　またきて四角　四角は豆腐　豆腐は白い
白いはうさぎ　うさぎははねる　はねるはかえる　かえるは青い　青いはやなぎ　やなぎはゆれる
ゆれるはゆうれい　ゆうれいは消える　消えるは電気　電気は光る　光るはおやじの　はげあたま

（笠木が子どもの頃にうたっていた唄）

さよなら三角　またきて四角　四角はトーフ　トーフは白い　白いはうさぎ　うさぎははねる
はねるはかえる　かえるは青い　青いはバナナ　バナナはむける　むけるは○○○

（笠木 1999：120）

（朝鮮の国民学校の生徒たちがうたっていた唄）

イロハニ　コンペイトー　コンペイトーはあまい　あまいはお砂糖　お砂糖は白い

白いは雲　雲ははやい　はやいは汽車　汽車は黒い　黒いはけむり　けむりは軽い
軽いは石油　石油は高い　高いは富士山　富士山は遠い　遠いは東京　東京はえらい
えらいは天皇　天皇は人間　人間はわたし（同前 120）

――「なんという見事で素晴らしい抵抗でしょう。天皇を人間に格下げし、私と同じだとは。あの、天皇は神とされ、不可侵の存在として、神聖化されていた時代に、朝鮮の子どもたちは、こんな歌をうたっていたのです。朝鮮語は禁止されていたから日本語です。一九三〇年代、朝鮮の国民学校の生徒たちがうたっていたもの。朝鮮では『コリタギ（しりとり歌）』という。この歌こそ、反日、抗日のうたの代表でしょう」（同前 121）。

(2)「少年行進曲　소년 행진가」（元歌「日本海軍」、替え歌の作詞：安昌浩、訳詞：笠木透）

四面海もて　かこまれし　わが「敷島」の「秋津州」　外なる敵を　防ぐには　陸に砲台　海に艦

鉄腕石拳　意気衝天　われら少年　たたかわん
　＊生まれ育った　わが大地　遊びまわった　山や川
　　体をきたえ　心をもやし　奪われた祖国を　取りもどせ
勇気凛凛　縦横無尽　われら少年　たたかわん
（＊繰り返し）
傍若無人　言語道断　われら少年　たたかわん
（＊繰り返し）
紅顔可憐　天真爛漫　われら少年　たたかわん
（＊繰り返し）
무쇠 팔뚝 돌주먹 소년 남아야　　애국의 정신을 분발하여라
다다랐네 다다랐네 우리 나라에　　소년의 활동시대 다다랐네
만인 대적 연습하여 후일 전공 세우세　　절세 영웅 대사업이 우리 목적 아닌가（同前 10-15）

(3)「独立軍歌　독립군가」（元歌「ジョージア・マーチ」）、替え歌の作詞：不詳、訳詞：笠木透）

われら大韓独立軍　祖国がわれらを呼んでいる
三千里三千万の同胞を　必ず救わん　君と僕
　＊進め　進め　いざ進め　　進め　進め　いざ進め
　　たとえ荒野に　倒れても　自由の鐘が　鳴る日まで
敵が強くても恐れるな　たとえ弱くてもあなどるな
いかなる困難があろうとも　最後の勝利は　君と僕
（＊繰り返し）
生きている限りは独立軍　死んだら独立軍の守り神
われらの誓いは鉄より固い　戦いぬかん　君と僕
（＊繰り返し）

鴨緑江も豆満江もとびこえて　侵略者の敵を追い出そう
奪われた祖国を取りかえし　万歳を叫ぼう　君と僕
（＊繰り返し）
신대한국 독립군의 백만 용사야　　조국의 부르심을 네가 아느냐
삼천리 삼천만의 우리 동포들　　건질 이 너와 나로다
나가 나가 싸우려 나가　　나가 나가 싸우려 나가
독립문의 자유종이 울릴 때까지　　싸우려 나가세（同前 28 - 33）

(4)「蜂起歌　봉기가」（原曲は1901年発表の「アムール河の流血や」、作詞：塩田環、作曲：永井建子。1911年に加藤明勝がこの曲に作詞した「歩兵の本領」を発表。[3] これを元歌とする替え唄が「蜂起歌」、替え唄の作詞者は不詳、訳詞：笠木透）

（原曲）**アムール河の　流血や　凍りて恨み　結びけん**
二十世紀の　東洋は　怪雲空に　はびこりつ
（元歌）**万朶の桜か襟の色　花は吉野にあらし吹く**
大和男子と生れては　散兵線の花と散れ

二千万の同胞よ　立ちあがれ　銃をかつぎ　剣をとれ
奪われた自由と　わが祖国を　敵の手から　取りもどせ
雨にぬれている　松の木も　墓にねむる　祖先たちも
老若男女　立ちあがれ　幼い子どもも　立ちあがれ
われらの血で　山をぬらし　川を真赤に　染めるとも
われらの敵を　追い出して　平和の鐘が　鳴る日まで
이천만 동포야 일어나거라　　일어나서 총을 메고 칼을 잡아라
잃었던 내 조국과 너의 자유를　　원수의 손에서 피로 찾아라　（同前 22 - 27）

B. 民謡
(1)「義兵隊歌」アリラン（作詞者不詳、朝鮮民謡、訳詞：笠木透）

五連発銃の弾丸はさびついて　火縄銃の銃身からは硝煙がただよう
エヘヤ　エヘヤ　エヘンエヘンエヘヨ　倭奴（ウエノム）の軍隊　全滅だ
倭奴が下駄を海にすて　東莱釜山を去る日は　いつかくる
エヘヤ　エヘヤ　エヘンエヘンエヘヨ　倭奴の軍隊　全滅だ　（同前 7）

(2)「光復軍」アリラン（作詞者不詳、朝鮮民謡、訳詞：笠木透）

うちの父母　おれを探したら　光復軍へ行ったと伝えておくれ
アリアリラン　アリアリラン　アラリヨ　光復軍のアリラン　歌おうよ
嵐が吹いてくる　嵐が吹いてきたよ　三千万の胸に　嵐が吹くよ

アリアリラン　アリアリラン　アラリヨ　光復軍のアリラン　歌おうよ　(同前 7 - 8)

(3)「鳥よ鳥よ青い鳥よ　새야 새야 파랑새야」(作詞者不詳、朝鮮民謡、訳詞：笠木透)

鳥よ鳥よ　青い鳥よ　緑豆の畑に　降りるなよ
　ハラハラ　花が散れば　豆腐うり[4] ばあちゃん　泣いちゃうぞ
鳥よ鳥よ　青い鳥よ　緑豆の枝に　止まるなよ
　ユラユラ　枝がゆれりゃ　鉄砲にうたれて　死んじゃうぞ
　　새야 새야 파랑새야　　녹두 밭에 앉지 마라
　　녹두 꽃이 떨어지면　　청포 장수 울고 간다　(同前 4 - 9)

――「この民謡には、いろんな解釈がある。青い鳥は、日本軍で、緑豆畑は農民軍。チョンポ売りは、朝鮮の民衆、といったもの。ぼくは、そうは思わない。ぼくの解釈は次の通りです。青い鳥は、農民軍に入ろうとする農民の青年。緑豆畑は、農民軍。チョンポ売りは、青年の親たちのことではないか。日本軍は、どこにいるのか。歌には出てこないが、緑豆畑をとりかこんでいるのではないか。青い鳥が降りたところが、農民軍の陣地だから、そこを鉄砲でねらえ、と。いずれにしても、この朝鮮の人たちが生んだ民族性あふれた歌は、いまでも人びとの心を打つ。農民たちの緑豆将軍[5] への思慕の心と、子どもを思う親の深い愛情と、素朴で明せきな悲しさが伝ってくる」(同前 7 - 8)。

C. 創作歌謡

(1)「長剣歌　장검가」(1900 年代、作詞：安昌浩、作曲：不明、訳詞：笠木透)

斜めにかかげた　わが剣は　祖国の自由を守るため
　遼東満洲で戦った　東明王(トンミョンオウ)の　その剣だ
　　＊ピカピカ　電光石火　ピカピカ　疾風怒濤
　　稲妻のようなわが剣が　祖国の自由を守るだろう
誰にも負けない　わが剣は　祖国の自由を守るため
　清川江(チョンチョンガン)で水兵をやっつけた　乙女(ウルチ)公の　その剣だ
　(＊繰り返し)
ギラリと光る　わが剣は　祖国の自由を守るため
　閑山(ハンサン)島で日本を撃破した　忠武(チュンム)公の　その剣だ
　(＊繰り返し)
　　쾌하다 장검을 비껴 들었네　　오늘날 우리 손에 잡은 칼은
　　요동 만주에 크게 활동하던　　동명왕의 그 칼이 방불하고나
　　번쩍 번쩍 번개같이 번쩍　　번쩍 번쩍 번개같이 번쩍
　　날랜 칼이 우리 손에 빛을 내어　　독립의 위력을 떨치는고나　(同前 18 - 21)

(2)「鳳仙花　봉선화」(1920 年、作詞：金享俊、作曲：洪蘭坡、訳詞：笠木透)

夏の風吹けば　そっと咲く花
　垣根の下の　赤いホウセン花
　　かわいい娘たち　つめを染めたよ
秋の風吹いて　花は枯れても
　タネをつけた　赤いホウセン花
　　遠くの大地へ　はじけていくよ
冬の風吹いて　おまえは消えても
　平和を夢見る　赤いホウセン花
　　春の風吹けば　いつか芽を出すよ
　　울 밑에 선 봉선화야 네 모양이 처량하다
　　길고 긴 날 여름철에 아름답게 꽃 필 적에
　　어여쁘신 아가씨들 너를 반겨 놀았도다　(同前 34 - 39)

――「鳳仙花は、夏に花ひらき、秋に実を結ぶ。その身はふくらんではじめ、種子が四方へとび散っていくという。侵略され、抑圧されていても、その抵抗の心と、独立への思いが、いっぱいつまった種は、はじけて、全国へとんで行き、やがて芽を出すだろう。この詩のどこにも、反日や、反帝国主義という言葉は出てきません。でも、この歌をうたうと、それが、ピンとくるのです。これが、これこそが、芸術の役割といえるでしょう」(同前 38)。

(3)「半月　반달」(1924 年、作詞・作曲：尹克栄、訳詞：笠木透)

夜空を渡る　小舟には　うさぎが一羽　木が一本
　帆もサオもないのに　不思議だね　渡って行くよ　西の国へ
銀河を越えて　雲の国　雲の国をこえて　どこへ行く
　遠くでキラキラ　光っている　明星の燈台だ　光の国へ
　　푸른 하늘 은하수 하얀 쪽배엔　　계수나무 한 나무 토끼 한 마리
　　돛대도 아니 달고 삿대도 없이　　가기도 잘도 간다 서쪽 나라로　(同前 40 - 45)

――「韓国、当時朝鮮は、夜の時代です。その暗い空を、小さな舟が渡っていくのです。そして、遠くに、明けの明星が光っている。もうすぐ夜明けが来るのです。光の国へ。韓国では、日本からの独立を、光復といいます。八月十五日は光復節というのです」(同前 44)。

(4)「故郷の春　고향의 봄」(1925 年、作詞：李元壽、作曲：洪蘭坡、訳詞：笠木透)

私の故郷　花の村　モモの花　アンズの花　山ツツジ
　いろとりどりの　花もよう　遊んだあの日が　なつかしい
私の故郷　鳥の村　緑の野原に　風吹けば
　川辺の柳も　おどり出す　遊んだあの日が　なつかしい
　　나의 살던 고향은 꽃 피는 산골　　복숭아 꽃 살구 꽃 아기 진달래

울긋불긋 꽃 대궐 차린 동리　　그 속에서 놀던 때가 그립습니다　(同前 46 - 51)

(5)「とき　따오기」(1925 年、作詞：韓昌東、作曲：尹克栄、訳詞：笠木透)

見えそうで　見えそうで　見えはしない　タオクタオク　タオクタオク　トキの声
　なきなき　どこまで　とんで行く　母さんさがしに　行くのだろう
捕れそうで　捕れそうで　捕れはしない　タオクタオク　タオクタオク　トキの声
　なきなき　どこまで　とんで行く　母さんどこへ　行ったのだろう
　　보일 듯이 보일 듯이 보이지 않는　　따옥 따옥 따옥 소리 처량한 소리
　　떠나가면 가는 곳이 어디메이뇨　　내 어머니 가신 나라 해 돋는 나라　(同前 58 - 63)

――「ある本によると、この詩の……『母さんどこへ』の母さんは、ハングルではネ･オモニで、このネ・オモニには、失った祖国という意味があるという」(同前 62)。

(6)「兄を思う　오빠 생각」(1930 年、作詞：崔順愛、作曲：朴泰俊、訳詞：笠木透)

トムプクトムプクくいな　田んぼで鳴き　カッコカッコかっこう　森で鳴くころ
　兄さん馬で　ソウルへ行った　きれいなくつを　買ってやると
キッロキッロかりがね　北から来て　コッロコッロこおろぎ　鳴いているのに
　兄さんからの　たよりもなく　木の葉がはらはら　散るばかり
　　뜸북 뜸북 뜸북새 논에서 울고　　뻐꾹 뻐꾹 뻐꾹새 숲에서 울 제
　　우리 오빠 말 타고 서울 가시면　　비단 구두 사가지고 오신다더니　(同前 52 - 57)

(7)「故郷を思う　고향 생각」(1930 年、作詞・作曲：玄済明、訳詞：笠木透)

山を見るなら　ふるさとの山　川を見るなら　ふるさとの川
　奪われた祖国を　取りもどすまで　帰りはしない　ふるさとの村
母を思えば　ふるさとの家　父を思えば　ふるさとの畑
　戦いつづけて　荒野にねむる　夢を見るなら　ふるさとの夢
空を見るなら　ふるさとの空　花を見るなら　ふるさとの花
　たとえ異国に　果てるとも　いつの日にか帰らん　ふるさとの土
　　해는 져서 어두운데 찾아오는 사람 없어　　밝은 달만 쳐다보니 외롭기 한이 없다
　　내 동무 어디 두고 이 홀로 앉아서　　이 일 저 일을 생각하니 눈물만 흐른다　(同前 64 - 69)

(8)「他郷暮らし　타향살이」(1934 年、作詞：金陵人、作曲：孫牧人、訳詞：笠木透)

他郷暮しも　幾年すぎた　行ってしまった　青春の日々
　日々をさすらい　行くあてもない　空の彼方の　はるかな故郷
故郷の柳の木　いまも青いだろう　草笛吹いていた　あの日に帰りたい

帰るも他郷　行くも他郷　いつまで続く　他郷暮し
　　타향살이 몇 해런가 손꼽아 헤어보니　　고향 떠나 십여년에 청춘만 늙어　(同前 70 - 75)

(9)「先駆者　선구자」(1932 年、作詞：尹海栄、作曲：趙斗南、訳詞：笠木透)

一松亭の青い松は　歳老いていくけど　ひとすじの海蘭江(ヘランガン)は　千年を流れる
　過ぎし日　川辺で　馬を駆せた先駆者　いまはいずこで　夢を見ているのだろう
龍井(ヨンジョン)村の井戸辺で　夜の鳥がなくとき　わが心の龍門橋は　月光にうかぶ
　過ぎし日　月を見て　弓をひいた先駆者　いまはいずこで　夢を見ているのだろう
龍珠(ヨンス)寺の鐘の音が　飛岩(ビアン)山にこだまする　わが生命のあるかぎり　闘いつづける
　祖国を　取りもどさん　心に誓った先駆者　いまはいずこで　夢を見ているのだろう
　　일송정 푸른 솔은 늙어 늙어 갔어도　　한 줄기 해란강은 천년 두고 흐른다
　　지난 날 강가에서 말 달리던 선구자　　지금은 어느 곳에 거친 꿈이 깊었나　(同前 76 - 81)

(10)「岩の峠　바위 고개」(1933 年、作詞・作曲：李興烈、訳詞：笠木透)

岩の峠を　ひとり越える　ふりかえりふりかえり　君を思う
　涙があふれて　何も見えない　さよならさよなら　もう会えない
峠に咲く花　ツツジの花よ　君は花のかげで　待っていてくれた
　並んですわって　明日を夢見た　さよならさよなら　もう会えない
岩の峠を　ひとり越える　ふりかえりふりかえり　君を思う
　10 年あまりの　下男暮しに　さよならさよなら　もう会えない
　　바위 고개 언덕을 혼자 넘자니　　옛 임이 그리워 눈물 납니다
　　고개 위에 숨어서 기다리던 임　　그리워 그리워 눈물 납니다　(同前 82 - 87)

(11)「涙にぬれた豆満江　눈물 젖은 두만강」(1935 年、作詞：金用浩、作曲：李時雨、訳詞：笠木透)

豆満江の流れに　呼びかけてみる　舟に乗って　渡って行った
　あの人はどこへ　どこへ行ったの　あの人はあの人は　いつの日帰る
月の光に　流れる夜の川　涙にぬれて　光っているよ
　あの人はどこへ　どこへ行ったの　あの人はあの人は　いつの日帰る
豆満江のほとりに　また秋がきて　紅葉をうつして　川は流れる
　あの人はどこへ　どこへ行ったの　あの人はあの人は　いつの日帰る
　　두만강 푸른 물에 노 젓는 뱃사공　　흘러간 그 옛날에 내 님을 싣고
　　떠나던 그 배는 어디로 갔소　　그리운 내 님이여 그리운 내 님이여　　언제 오려나
(同前 88 - 93)

(12)「わが国の花　우리나라 꽃」(1956年、作詞：パク・ジョンオ、作曲：ハム・イヨン、訳詞：笠木透)

ムクゲ　ムクゲ　国の花　三千里　野や山に　わが国の花
　ムグンファ　ムグンファ　ウリナラコッ　サムチョルリ　カンサネ　ウリナラコッ
咲いた　咲いた　国の花　三千里　野や山に　わが国の花
　ピヨンネ　ピヨンネ　ウリナラコッ　サムチョルリ　カンサネ　ウリナラコッ
　　무궁화 무궁화 우리나라 꽃　　삼천리 강산에 우리나라 꽃　(同前94 - 99)

(13)「日照り 가뭄」(1971年、作詞・作曲：金敏基、訳詞：笠木透)

日照りつづきの　道に土ぼこり　谷間の村に　乾いた風が吹く
　道端に咲いた　きれいな小さな花　太陽にやかれて　立ち枯れているよ
　　＊エイヘイヤ　ハラリヤ　ハラリナンダ　エイヘイヤ
　　竹やぶが枯れると　国が滅ぶと人はいう
日照りつづきの　ひび割れた田畑　荒れた畦道を　ネズミが走りまわる
　並んだ竹やぶ　みんな死んでしまったのか　軒下のコケまで　ひからびているよ
　(＊繰り返し)
日照りつづきの　道を歩いて行けば　太陽は無情　雨はいつ降るのだろう
　のどはカラカラ　涙もかれはてた　あんまり悲しいんで　笑いたくなってきたよ
　(＊繰り返し)
　　갈숲 지나서 산길로 접어들어가　　몇 구비 넘으니 넓은 곳이 열린다
　　길섶에 핀 꽃 어찌 이리도 고우냐　　공중에 찬 바람은 잠 잘 줄을 모르난다
　　에헤야 얼라리야 얼라리난다 에헤야　　텅 빈 지게에 갈잎 물고 나는 간다 (同前100 - 105)

(14)「朝露　아침 이슬」(1972年、作詞・作曲：金敏基、訳詞：笠木透)

長い夜が明けた　草の葉に朝露　人びとの落した　涙のようで
　悲しみがキラキラ　光っている　朝焼けの丘に立って　心も晴れていく
日ざしをあびて　消えていく朝露　でも時代は決して　後もどりはしないだろう
　私は行く　荒野をめざして　悲しみをこえて　私は行く
　　긴 밤 지새우고 풀잎마다 맺힌　　진주보다 더 고운 아침 이슬처럼
　　내 맘에 설움이 알알이 맺힐 때　　아침 동산에 올라 작은 미소를 배운다
　　태양은 묘지 위에 붉게 타오르고　　한낮에 찌는 더위는 나의 시련일지라
　　나 이제 가노라 저 거친 광야에　　서러움 모두 버리고 나 이제 가노라　(同前106 - 111)

Ⅱ. 中国

B. 民謡

(1)「看看鬼子（カンカンコゥイズ）（日本の奴らを見てやろう）」

鉄道線路をひっぱがし　掀掀铁
電信ばしらを抜き倒し　拔拔线杆
見てやろう　日本の奴らが困るかどうか！　看看鬼子难不难！（柿崎 1974：155）

――「鉄道と電柱の破壊は八路軍戦術の一つ」（同前 155）。

(2)「抗日救国歌」

空は昏く　陽は光なし　国土は今は倫亡の　関頭にたちておののけり
江山寂々声を呑み　四億の民の哀泣に　歴史のしたたる血の色や
革命いまだ成らざるに　東北すでに敵の有となる
天も聞け！　民族の慟哭！　惨また惨　敵は虎狼の爪をとぐ　肥沃富饒の華北の地
今まさに蹂躙されんとす　危きかな祖国　危きかな祖国
われら書物を抛（なげう）って　祖国の危機に立たざれば　父祖の国土を如何せん　（富山 1983：15）

(3)「抗日行進曲」

われらは生きねばならぬ　われらは戦わねばならぬ　我们要生存 我们要抗战
われらは　祖国解放を担うすぐれた一群だ　我们都是优秀的一群
さあ手に手をとり　担负了祖国解放的责任
さあ肩を支え合い　来我们手牵着手 来我们肩靠着肩
鉄の陣営を築こう　结成铁的阵线

刀は光る　旗はきらめく　刀儿光亮 旗儿辉煌
馬はいななく　馬は高らかにいななく　马儿高喊 马儿高声雄壮
頭をあげ　足を踏みしめ　前進しよう　昂着头大踏步向前走
ファシストどもを一掃しよう　把法西斯帝的狗党扫光吧
日本の強盗をわれらの地より追いだそう　日本强盗赶出我们的疆　（同前 33）

(4)「光復后（コワンフゥホォウ）（平和が来たのに）」

去年抗戦勝利をしたのに　去年抗战得胜利
今年ぁ災難どこでも飢饉　今年灾难荒遍地
蔣とアメリカ帝国主義に　老蒋和美帝国主义

やられて百姓は息さえつけぬ　　压迫的百姓不得出气　（柿崎 1974：155）

(5)「打東洋（タートゥンヤン）（日本を討て）」

のこぎりソレ押せ　ヤレ引きな	扯大锯　拉大锯
県城の街に　芝居がかかる	县城里　有大戏
爹（ちゃん）も行かない　妈（おっか）も行かぬ	爹不去　妈不去
可愛い坊やも　また行かぬ	小宝宝　也不去
ちゃんはせわしい　苗木植え	爹爹忙　栽树秧
おっかもせわしい　桑つみで	妈妈忙　去采桑
子どもは急いで　学校へ	宝宝忙着上学堂
木が育ったら　梁にする	树长大　作栋梁
蚕が育てば　糸を吐く	蚕长大　吐丝长
子どもが育てば　日本を討つ	宝宝长大打东洋　（同前 152）

(6)「大老美（ターラオメイ）（アメリカさん）」

大きなアメリカさん　小さなアメリカさん（英国）	大老美	小老美
二つにして切ったら　それはまったく日本人	切下半截儿	就活脱是日本鬼　（同前 157）

――「アメリカの次のアメリカ、それは英国。米英両国の真似をしたのが日本の野郎の意」（同前 157）。

(7)「叫儿报仇（チィアオアルバオチョウ）（子どもに仇を）」

お陽さん　おひるだ	日头正正高
手にバケツさげ	手提洋铁锹
井戸へ水くみ	上井台去打水
飯を炊く。	回来把饭熬。
大嫂（おばさん）（呼びかけ）	大嫂.....
どうして自分で水くむの？	你为什么自己打水？
あんたの旦那はどこへいった？	你先生那里去呀？
わたしの夫と聞かれるならば	提起我的郎呀
怨みを残して死にました	死的还没怨冤
日本の奴らに手榴弾を	日本鬼子扔炸弹子
頭に一発ぶちこまれ	一下扔在他头上
どうして仇討ちに行かないの？	你怎么不去报仇？
仇を討ちには行きたいが	有心去报仇
脚が小（ち）さくて行かれない	脚小不能走

抱いてる赤子(やや)の育つを待って　　等着怀里的小娃娃
父の仇を討たせます　　长大给爹报仇　　（同前 153-154）

――「この民謡は山東地方のもの、昔から山西、山東地方には他省より纏足が多いといわれている。纏足の歴史は正確にはわからないが、一説には後唐（十世紀前半）の李王の娘が足を絹布で包み、小さく見せて踊ったことが非常に美しく見えたので、宮中の女達がこれをまねたことが初めといわれ、後年民間にも流行し、纏足することが美人の条件になるようになったもの。また幼女期からこれを包んでいるので、激しい臭気があり、これが男子の変態的性欲を刺激して、美人と性欲の両方面から流行したものといわれている。国民政府の初期、これを厳禁したので減少したが、解放後は全くなく、本来の“大脚”となっている」（同前 154）。

(8)「解字謡(チィエ ズ ヤオ)」（字とき歌）

去(い)んだは日本　　去了口中口
来たのは美国(アメリカ)　　来了天上天　　（同前 156）

――「行ってしまったのは口の中の口……（なあにか？）、来たのは天の上に天……（なあにか？）というもの。口の中に口のある字は“日”、天の上に天のある字は“美”すなわち美国(アメリカ)」（同前 156）。

(9)「八年担子(パァニィエンタンズ)（八年の重荷）」

八年重荷を背にかつぎ　　八年担子驼了背
勝利は新税つれて来た　　胜利带来新捐税
日本(ちぴ)が去(い)んだらアメリカ(ながいの)が来た　　矮的去了长的来
百姓は結局活きられぬ　　百姓总归活不来　　（同前 155-156）

――「矮的は背が低い。つまり日本人。長的は高い。つまりアメリカ人」（同前 156）。

(10)「苜蓿芽儿(ムゥスーイヤル)（うまごやしの芽）」

うまごやしの芽は湯であえよ　　苜蓿芽儿拌拌汤
日本人めは河岸(かし)で死ね！　　日本死在河岸上！
麦わら焚いて芋を焼こ　　谷子秆儿烧芋头
日本、山の後(うしろ)で敗けろ！　　日本败在山后头！　　（同前 153）

――「日本人への一種ののろいともいえる民歌。なお苜蓿(うまごやし)の若い芽、十センチ前後のものを、四、五分間熱湯でゆで、これをきざんで豚肉などとザッと炒り、これを餃子の餡にする。決してまずいものではない」（同前 153）。

(11)「日章旗（リィチャンチ）（膏薬旗）」

役所に掲げた太陽旗　通り過ぎるにゃ拝まにゃならぬ
拝まにゃ死ぬほど殴られて　馬鹿みた同胞は苦力（クーリー）にされる　（同前 151）

――「日章旗のことを太陽旗または膏薬旗といわれている。膏薬旗というわけは、漢方薬の腰痛の特効薬で、長方形の白い厚紙の二つ折りの中に、同じく二つ折りにして包まれている赤褐色の円い膏薬があるが、これを暖めて開くと、ちょうど日章旗に似ているからである」（同前 151）。

(12)「良民証（リィアンミンチョン）（身分証明書）」

毎日城内（まち）へ行きたいが　良民証を手にもって　　天天想进城　手拿良民正
良民証をなくしたら　耳はなくなり菓子になる　　失丢良民证　耳光当点心（同前 151-152）

――「良民証を持たないで外出することは最も危険なことで、もし落としたりなくしたりすた（ママ）ことが見つかれば、めちゃめちゃにビンタをはられ、耳がなくなって、せんべいにされてしまう」（同前 152）。

C. 創作歌謡
(1)「九（チュウ）・一八（イイバア）」（作詞・作曲：張寒眸、訳詞：不明）

我が家は東北松花江のほとりに在り　　我的家在东北松花江上
森林と炭鉱と　　那里有森林煤矿
また　見渡す限りの大豆と高粱畠　　还有那满山遍野的大豆高粱
我が家は東北松花江のほとりに在り　　我的家在东北松花江上
我が同胞と老いたる父母が住む　　还有那衰老的爹娘
九一八　九一八　あの悲惨な時から　　九一八　九一八　从那个悲惨的时候
九一八　九一八　あの悲惨な時から　　九一八　九一八　从那个悲惨的时候

我が家郷を離れ　あの豊かな宝庫を捨てた　　脱离了我的家乡　抛弃那无尽的宝藏
流浪に次ぐ流浪　今　関内をさすらう　　流浪！流浪！ 整日价在关内、流浪！
いずれの年　いずれの月　　那年　那月
我が愛する故郷へ帰れようか　　才能够回到我那可爱的家乡？
いずれの年　いずれの月　　那年　那月
あの豊かな宝庫を取り戻せようか　　才能够收回我那无尽的宝藏？
ちちははよ　ちちははよ　　爹娘呀、爹娘呀、
いつの日我が家で　歓びをともにできようか　　什么时候才能够欢聚在一堂　（坂本 1986：220-226）

――「昭和六年九月十八日夜、奉天郊外八キロの柳条湖付近で満鉄線爆破が起こった。関東軍はこ

の爆破を、「支那軍隊」による事件だとし、奉天、新京、吉林などを占領して満州事変の突破口とした。爆破の実行者は関東軍将校で、軍の力で「満洲国」を建設するための謀略とされている。中国で九・一八事変というこの爆破を契機に、中国東北地方の中国人たちは、自分の土地の主人公ではなくなっていく。歌はこの「九・一八」以後、日本軍の攻撃で東北地方を追われ、関内（山海関の南部、万里の長城関内）へ流浪した張学良統率下の兵士たちが、望郷と恨みの思いを込めて歌ったといわれ、以後、「抗日」の哀歌となった」（同前 220-221）。

Ⅲ．台湾

A. 替え唄

(1)「追悼歌」（元歌「幌馬車の唄」作詞：山田としを、作曲：原野為二）

夕べに遠く木の葉散る　並木の道をほろほろと　君が幌馬車見送りし　去年(こぞ)の別離(わかれ)が永久(とこしへ)よ

死に追いやられた同志よ安らかに眠れ　安息吧死难的同志
もう祖国を憂うことはない　别再为祖国担忧
あなたの流した血が道を照らし　你流着血照亮的路
われわれの行く手を示す……　指引我们向前走……　（田村 1992：178）

――「追悼歌は大陸の左翼学生がよくうたった歌だ、と林さんは静かな声でうたいだした。一九五〇年には、大陸の左翼の影響がここまでおよんでいたのだ」（同前 178）。

Ⅳ．ビルマ（ミャンマー）

A. 替え唄

(1)「世界が滅びない」（原曲「アムール河の流血や」、元歌「歩兵の本領」、Ⅰ．韓国・朝鮮　A-（4）「蜂起歌」を参照のこと）

（原曲）**アムール河の流血や　凍りて恨み結びけん　二十世紀の東洋は　怪雲空にはびこりつ**
（元歌）**万朶の桜か襟の色　花は吉野にあらし吹く　大和男子と生れては　散兵線の花と散れ**

情愛の絆　慈しみの心　断ち切りて　愛する者　捨て来し　我ら
戦いこそ　我らが使命　勝利のときまで　戦わん
集い来たり　尊き血　受け継ぎし　勇みし　我ら
死ぬるも　生くるも　決意は揺るがず　世界が滅びぬ限り　我らビルマ人
我らが国を所有せん　親しきは　我が死に神　汝に誓わん　（テイン 1992：159-160）

――「当初、ビルマ独立運動を担ったタキンたち（「我らのビルマ組織＝タキン党」を指す…鵜野注）が独立闘争を鼓吹するため歌っていたが、一九四四年九月、アゥンサン将軍を指導者に反ファシスト人民自由連盟が結成され、抗日反乱が決定されると、当時、ビルマの人々が“ファシスト日本”と呼んでいた日本軍に対する抗日闘争を鼓吹する歌として歌われた」（同前 227）。

V．フィリピン

B．民謡

(1)「フクバラハップの歌」

愛する祖国の旗の下　団結を固め抵抗しよう
　我が祖国フィリピンの絶対の自由をとりもどすために
男も女も老人も青年も闘いに起ち上がろう　ファシスト日本人に対決しよう
　若者も誰も　みな闘いに起ち上がる
ファシストの日本人を追い払おう
　祖国を壟断し富を奪い女をレイプし人民を殺したファシストを追い払おう
　　フクバラハップ万歳　我らは叫ぶ
破壊された祖国の尊厳　多くの人民が財産を奪われ斬首された
　こんなことをやった後で　日本人は言う
「日本人はフィリピンの敵ではない。同じ（東洋）人種なんだから」と
我ら人民は起ち上がる　日本人と戦い　日本人を追い払うために
　奪われた愛するフィリピンの尊厳のために　フクバラハップ万歳　（ヘンソン 1995：51-52）

――「フクバラハップの参加者はたいてい一八歳くらいから四五歳くらいでしたが、一四歳だった私が最年少だったわけではありません。私のような年頃の少女が他にもいました。（中略）私たちフクバラハップには、団の歌がありました。バムバンガ州の方言（カバムバガン語）で歌いました。（中略）フクバラハップに参加して私が一番に学んだことは、人権の尊重ということです。何人の人権も侵害されてはならないという信念は、今も私の心に生きています。フクバラハップは日本の軍事的侵略、植民地支配と国内の抑圧勢力に反対し、フィリピン人民の側にたって闘っていました。私はその一員であったことを人生の誇りと思っています」（同前 51-52）。

(2)「日本人に気をつけろ [Mag-ingat sa Hapon]」[6)]

日本人　日本人が来る　日本人　[HAPON, HAPON NARIYAN NA ANG HAPON]
日本人が来るぞ　気をつけろ　[MAG-INGAT AT NARIYAN NA ANG HAPON]
爆撃機が来るぞ　トラ・トラ　[AGA EROPLANONG TORA-TORA]
爆弾積んで　やって来る　[LUMILIPAD AT MAY MGA DALANG BOMBA]
フィリピン人の女は　憲兵隊にレイプされ（バンザイ）

[MGA PINAY GINAGAHASA NG KENPEITAI（BANSAI)]

たくさんのフィリピン人が殺された（バッキャローネ！）

[MGA PILIPINO'Y PINATAY（BAKERO NE!)]

注

1）Ⅰ-C-（12）（13）（14）の3編は、作品の発表が各々1956年、1971年、1972年であり、厳密には「反日・抗日のうた」とは言えないが、笠木（1999）に収載されているため本稿にも掲載することにした。

2）目次にある18編の他、「あとがき」（120頁）に「イロハニコンペイトー」が、また7-8頁の脚注に「義兵隊歌」アリラン、「光復軍」アリランの2編が収められている。

3）長田暁二編著『日本軍歌大全集』全音楽譜出版社1970、77頁及び90頁を参照。

4）笠木（1999）4頁の歌詞には「豆腐」と記されているが、解説文は「チョンポ」で統一されている。「チョンポ（青舗)」は緑豆の煮汁を固めて作った寒天のようなお菓子のこと（同前7頁)。

5）甲午農民戦争（東学党の乱、1894年）で農民を率いて戦った全琫準の愛称。

6）光吉由美子氏からの情報提供。手書き資料。

引用・参考文献

・井出孫六『終わりなき旅－「中国残留孤児」の歴史と現在－』岩波書店1986
・長田暁二編著『日本軍歌大全集』全音楽譜出版社1970
・柿崎進『中国の民歌』現代企画室1974
・笠木透『鳥よ鳥よ青い鳥よ　日本の侵略と韓国の抵抗のうた』たかの書房1999
・坂本龍彦『残留日本人への旅　四十年目の満洲』朝日イブニングニュース社1986
・田村志津枝『非情城市の人びと』晶文社1992
・テイン、マアウン（河東田静雄訳)『農民ガバ　ビルマ人の戦争体験』大同生命国際文化基金1992
・富山妙子『はじけ鳳仙花』筑摩書房1983
・ヘンソン、マリア・ロサ・レ（藤田ゆき訳)『ある日本軍「慰安婦」の回想　フィリピン現代史を生きて』岩波書店1995
・森正孝『中国の大地は忘れない－侵略、語られなかった戦争－』社会評論社1995

（本学文学部教授）